『おくのほそ道』冒頭

※月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。
月日は永遠の旅人であって、おとずれては過ぎ去る年もまた旅人である。

舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、
舟の上で一生を送る者（船頭）や　馬のくつわを取って老年をむかえる者（馬子）は、

日々旅にして旅を栖とす。※古人も多く旅に死せるあり。
日々が旅であって　昔の人にも、多く、旅の中で死んだ人がいる。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、
私もいつの頃からか、　ちぎれ雲が風に誘われるように、

①漂泊の思ひやまず、※海浜にさすらへて、
漂泊の思いがやまず、（近年は）海辺をさすらって、

去年の秋、※江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、
隅田川のほとりのあばらやに（もどり、）蜘蛛の古巣を払って、やがて年も暮れたが、

春立てる霞の空に、※白河の関越えむと、
新春（新年）となり霞が立ちこめる空のもとで、白河の関を越えたいと、

そぞろ神の物につきて心をくるはせ、
そぞろ神がとりついて心をそわそわさせ、

※道祖神の招きにあひて取るもの手につかず。
道祖神が招いているようで何も手につかない。

②股引の破れをつづり、笠の緒付け替へて、※三里に灸据ゆるより、
つくろい、　灸をすえると、

※松島の月まづ心にかかりて、
松島の月のことがまず気にかかって、

住める方は人に譲りて、※杉風が別墅に移るに、
今まで住んでいた庵は人に譲って、　杉風の別荘に移ったが、

E　草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
わびしかった草庵も、あるじが住み替わる時が来た。
（これまでとは違って）雛人形をかざる華やかな家だよ。

※面八句を③庵の柱に懸け置く。
（という句を発句にした）面八句を（これまで住んでいた）庵の柱に掛けておいた。

※月日は…李白の文章をふまえたもの。
古人…中国の李白・杜甫、日本の西行・宗祇など、人生の大半を旅に過ごした詩人・歌人を念頭におく。
海浜に～…一六八七年から翌年にかけて、芭蕉は鳴海（愛知県）、明石（兵庫県）などを旅した。
江上の破屋…江戸の深川（現在、東京都江東区西部）の隅田川のほとりにあった芭蕉庵のこと。江はここでは隅田川を指す。
白河の関…奥州への関所。現在の福島県にあった。　道祖神…道行く人を守る神。
三里…ひざがしらの下の外側のくぼんだ部分で、ここに灸をすえると足を丈夫にし、万病にきくという。
松島…現在の宮城県松島湾一帯。日本三景の一つ。
杉風が別墅…芭蕉の門人であった杉山杉風の別荘。
面八句…連歌・俳諧で、百韻（百句からなる連句）のときに、懐紙の一枚目の表に記す八句。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「漂泊の思ひ」とはどのような思いか。適当なものを選びなさい。

ア　あてのない旅に出たいという思い。
イ　ものごとの移り変わりをむなしく感じる思い。
ウ　新たな仕事に取り組もうとする思い。

〔　　〕

(2) ――線②「股引の破れをつづり」とあるが、何のためにこのようなことをしているのか。適当なものを選びなさい。

ア　あばらやの掃除（そうじ）をするため。
イ　旅の支度（したく）をするため。
ウ　道祖神への供え物とするため。

〔　　〕

(3) Eの句に含（ふく）まれる季語と、季語が表す季節を答えなさい。

季語〔　　〕　季節〔　　〕

(4) Eの句に含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類をア～ウで答えなさい。

切れ字〔　　〕　句切れ〔　　〕

ア　初句切れ　イ　二句切れ　ウ　句切れなし

(5) ――線③「庵」が指す建物として適当でないものを選びなさい。

ア　江上の破屋　イ　住める方
ウ　杉風が別墅　エ　草の戸

〔　　〕